

国際理解教育の実践

前ダッカ日本人学校 校長

鹿児島県出水市立切通小学校 校長 丸 田 豊 通

キーワード：国際理解教育，英語教育，校内（職員）研修，教育課程，授業実践

1. はじめに

平素から、海外日本人学校で働くことで、日本の教育と文化を見つめ直し、海外における子どもたちを取り巻く環境でどのような健全育成を図っているのか学びたい、という強い気持ちがあり、在外教育施設派遣にチャレンジした。縁があって在外教育施設のバングラデシュ日本国大使館附属ダッカ日本人学校で勤務をすることになり、この3年間、私は貴重な経験をする事ができた。その中で「グローバルな社会を生き抜く人間をどう育てるか」というテーマを掲げ、国際理解教育の実践を行うと共に課題解決に取り組んだ。

2. 特色ある教育課程の実践

(1) 本校の実態

- ①派遣教員6名（校長含む）が7学年を担当している。小規模校においては、学年によっては複式学級の編制であり、教科によっては複式授業を行っている。
- ②一学年の人数が少ないため実技や実習・演習等の活動を伴う教科については、少ない人数で授業を行わなければならないという課題が見られる。そのため、生き生きと授業を展開するためには教科の特性を知り、それを生かした複式授業を行う必要がある。
- ③複式授業の経験のない教諭がほとんどで、基礎学力の定着や学級経営力の視点について教師の力量を高めていくことが大きな課題である。
- ④複式授業の実践を通して教師の力量を高めていくが、指導の工夫や授業の在り方の意見交換を行う校内研修の充実が重要な課題である。
- ⑤在外教育施設の視点から、保護者は英会話や英語力について関心が高い。

(2) 本校の英語教育の実態について

- ①英語で自分の意思を自由に伝えられる児童生徒はいない。ほとんどの児童生徒は、簡単な単語をならべて話す程度の英語力で、英会話能力は十分とは言えない。
- ②バングラデシュにおいては英語が様々な場所で使われており、英語に触れる機会は多い。しかし、児童生徒の生活圏は日本人社会の中であり、学校生活・家庭生活においても英語に対する必要感は乏しい。
- ③職員のほとんどは英語教育の経験が乏しく、英会話能力も十分ではない。
- ④一人が日本人、一人がバングラデシュ人の2名の現地採用教員を確保し、英語教育の実践に努めている。
- ⑤保護者の英語教育に対する要望は強い。
- ⑥特色ある学校づくりの一つに英語教育の充実を掲げ、しっかり英会話（週1時間）、みんなで英会話（週1時間）の週2時間を英語教育の実践に努めている。

(3) 本校における英語教育の考え方について

英語に触れたり、英語を通して様々な外国の生活や文化をなどに慣れ親しんだりするなどの体験的な学習を取り入れて英語への興味・関心を育てる。

- ①英語教育に触れる活動を展開する

- ア 生の英語を聞いたり、まねたりなどの音声重視の指導を行う。
- イ 具体物やゲーム、歌、遊びを通して英語への興味・関心を持たせる。
- ウ 外国人講師との触れあいや現地インター校（シンガポール校）との交流を通して英語の意欲を育てる。
- ②異文化に触れ、親しむ活動やコミュニケーション活動を展開する。
 - ア 外国人講師との触れあいを通して異文化を知覚させ、自国との比較をさせ、お互いの違いや良さに気づかせる。
 - イ 外国人講師との触れあいを通して直接に伝え合う楽しさ、言葉の持つ楽しさ（リズム）を感じさせる。

(4) 本校の英語教育の取り組みについて

- ①日本人講師と外国人講師によるTT指導体制
- ②小学部、中学部週2時間の英会話の時間の確保
- ③派遣教員の資質向上（積極的な英会話参観、教材研究）
- ④読み聞かせ、ゲーム、歌、音楽等を取り入れた指導法の工夫
- ⑤現地校、インター校との交流（エンゼンル協会、シンガポール校）
- ⑥英語検定（児童英検）への挑戦（年1回）
- ⑦学習発表会での英語劇上演
- ⑧教材の確保（児童生徒が興味関心を持つような教材の選定）

(5) 課題の分析

- ①複式授業に不安を抱いている保護者もあり、また複式授業の経験のない職員がいることから、基礎学力の定着を図るために国語、算数（数学）、理科、社会、英語については、単式の授業を行うこととした。
- ②教科（音楽・図工・家庭・体育・道徳・生活・総合的な学習の時間）によっては、複式授業の在り方を職員研修に位置づけ、教科の本質を捉えた複式授業の実践に取り組む。
- ③一人一回の研究授業を通して教師の力量を高めたり、校内研修を通して学級経営力を身につけたりする必要がある。
- ④職員研修は、派遣教員のみならず現地採用教員も参加させ、複式授業の在り方や指導の工夫、評価の仕方等意見交換を行い、日頃の悩みや相談の場を確保する必要がある。
- ⑤当初申告の面談を通して一人一人の到達目標を設定させ、職員一人一人に学級経営の意識付けを図るとともに校務分掌の機能化に努める。

3. 校内研修における取組

(1) 校内研修の充実

- ①一人一回の研究授業を行い、課題意識をもって研究協議を行う。
- ②指導案を作成して授業に臨み、研究協議についても記録に残し、1年間の累積したものをまとめ、次年度に生かした継続した研究の実践を行う。
- ③言語活動の充実を図る観点から指導案に言語活動の視点を位置づけ、研究協議で意見交換の視点の一つとする。

(2) 評価に基づいた課題解決

- ①学期ごとに児童評価・保護者評価・学校評価のアンケートを行い、変容や実態にもとづいて課題を解決する。
- ②PDCA（Plan-Do-Check-Act）マネジメントサイクルにもとづき、係を中心とした現状の把握や次回の対策を講じる。

③各種検査結果を的確に把握し、実態に基づいた手立てを講じる。

(3) 校内研修の現状

①確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を基本とした「生きる力」を育むことをねらいとした校内研修体制を整える。そのため、

ア 道徳教育の充実並びに「ありがとう」が言える子どもの育成

イ 英会話を中心としたイメージ教育の実践

ウ 言語活動の充実を柱に思考力・判断力・表現力の育成

を重点目標に掲げ、基礎学力定着のための教育課程の編成を推進する。

②学習の基本となる「読み・書き・算」を日課表に位置づけ、授業での実態や標準学力検査や各種検定の結果を分析し、課題にもとづいた目標を設定し解決策を講じる。

③研究主題を「自分の考えをもち、生き生きと表現できる子どもの育成」とし、目的意識をはっきり持ち、一人1回の研究授業を通して検証を行い、教師の力量を高めるなど校内研修の充実に努める。

④PDCA マネジメントサイクルにもとづいた実践を行い、アンケートをもとに実態を把握し課題を解決する。

(4) 授業分析

①道徳の時間を確保するとともに家庭との連携に努める。

②教材・教具の工夫や人材を確保するとともに英会話を含めた英語教育の充実を図る。

③思考力・判断力・表現力の基盤となる「言語活動」を充実させるにあたり、すべての教科でそれを意図的に組み込んだ指導が必要である。

④適切な人材の確保や教材・教具の工夫を図りながら、各教科等横断で取り組む教育活動についても、多様な言語活動を関連的に取り入れた学習活動を展開する。

⑤授業のどこに「意識して組み込む」のかを考えることで、より質の高い指導を考慮する。

(研修の視点)

視点1：話し合う必要感を生む単元構成

視点2：個々の思いを伝え合うための教師の関わり

視点3：話し合う力の高まりを実感できる支援・評価

(5) 改善内容の検討

①授業（教科）での取組

一人1回、年間6回の研究授業を設定し、研究協議の内容も含めた1年間の成果と課題についてまとめ、次年度に向けての研究の方向性を定める。また、研究授業においては、本校のテーマである「言語活動」の場面を意図的に組み込んだ授業を構築し、全職員でPDCAサイクルに基づいた授業研究を行う。

ア Plan（計画）：研究の視点に沿った単元構成や本時案を考える。目指す児童・生徒の姿を明らかにし、変容を促す手立てを指導案に記載し、主張の見える授業をする。

イ Do（実施）：校内の多くの教師が参観できるよう体制を整える。参観者は授業記録をとり、授業研究で意見交換の際に活用を図る。

ウ Check（評価）：授業者は、あらかじめ評価の視点を明確にすることで、視点に沿った授業実践を行う。（指導案の中に★をつけること）授業研究会で授業後の反省を行う。

エ Act（改善）：評価をもとに、再構築して今後の授業に生かしていく。研究授業を日々の教育活動に結びつけ、授業改善につなげていく。

②ダッカタイム（総合的な学習の時間）での取り組み

バンガラを知ろう（一日遠足との兼ね合い）、シンガポールスクール校との交流、エクマトラとの交流、JOCV 隊員との交流、移動教室など体験活動や交流を通して児童・生徒の言語活動の充実を図る計画的な校内研修を実施する。また、総合的な学習の時間は、児童・生徒が自発的に横断的・総合的に課題を解決する学習を行う時間である。

③朝学習（15分）での取組

日・月⇒英語タイム、火⇒算数タイム、水⇒国語タイム（短歌・俳句づくり、漢字）、木⇒読書タイム
毎日の授業に入るまでの15分間を朝学習の時間とし、反復学習を基本にそれぞれの教科における基礎・基本の定着を図る時間とする。また、保護者にも読み聞かせや計算、漢字のボランティアなどをよびかけ、協力を要請している。

④イマージョン教育の実践

保護者の不安解消や要望、そして、在外教育施設であることから、英語教育は必要不可欠な課題である。そのため、1・2年生の生活科と3・4年生の図工科、5・6年生の図工科にイマージョン教育を実施し、子どもたちの英語力を高めている。また、国際社会におけるコミュニケーション手段として英語のさらなる習得を目指し、英語を用いた自己表現力の基礎を養うことを目的としている。



⑤言語活動の充実

学期に1回のスピーチ大会をとおして、どの子も思考力・判断力・表現力の育成に取り組んでいる。また、学習発表会（10月実施）では、各学年部の発表と全校児童・生徒による英語劇に毎年取り組んでいる。保護者や日本人会の好評を得ながら、英語による表現力の育成にも取り組んでいる。職員も1回の研究授業を通して、子どもの言語活動の変容をPDCAマネジメントサイクルのもと取り組んでいる。



⑥その他

ア 評価の方法は、児童評価・保護者評価・学校評価の3種類を学期ごとに行い、その都度、変容や実態を職員研修の中で確認を行い手立てを講じている。

イ 本年度も児童英検・英語検定・漢字検定を実施する。数値データや等級の上昇など目に見える形で進歩の度合いを知ることにより、今後のさらなる意欲につなげていく。

ウ 海外子女教育財団等が主催しているコンクールなどへ積極的に応募し、子どもたちの学習成果を発表する場とする。

エ 教科指導だけにとどまらず、特別活動を含めた全教育活動において、子どもの変容を評価することを共通理解し、機会あるごとに意見交換の場として研修体制を整えている。

オ 毎月1回は、全職員で心の教育推進委員会を開催し、学習面・生活面・健康面等について、子どもたち一人一人の変容や気になる様子等話し合う時間を設定している。

カ 修学旅行での実践の場や現地校との交流活動を通して、子どもたち一人一人の理解に努め、職員間のコミュニケーションなどの情報交換を行い、時間にとらわれない有意義な研修体制も実践している。